

[野菜部門 平成30年度 指導参考資料]

事 項 名	いちご「なつあかり」の春定植作型における「ランナー子株の冷蔵後挿し苗」技術		
ね ら い	夏秋いちご栽培において生産苗を自家採苗する場合、農繁期である8～10月に鉢受け・仮植作業をしなければならず生産者の作業負担が大きい。そこで、農繁期の鉢受け・仮植作業を実施せずに放任したランナー子株を冷蔵した後に挿し苗を行う「ランナー子株の冷蔵後挿し苗」技術を開発したので参考に供する。		
指 導 参 考 内 容	<p>1 ランナー子株の採苗・冷蔵方法</p> <p>(1) 親株の栽培管理は夏秋いちご栽培マニュアル（青森県農林水産部農産園芸課 平成22年発行）に従う。</p> <p>(2) 親株から発生したランナー子株は鉢受け・仮植をせずに放任する。放任する際、ランナー子株と土表面の間に白マルチ等を敷き、根が張らないようにするとともに、ランナー子株の日焼けを防ぐ。</p> <p>(3) 11月上旬にランナー子株を親株から切り離す。</p> <p>(4) 切り離したランナー子株はトップジンM水和剤を用いて浸漬処理し、水気をきってからポリ袋等に入れ、-1℃で冷蔵する。</p> <p>(5) 2月中旬以降に苗を出庫し、ポットに挿し苗し、ハウス内で定植まで育苗する。</p> <p>2 収量性</p> <p>(1) 株あたり総収量430～738g、可販果収量272～499gとなる。10aあたりでは総収量2.7～4.6t、可販果収量1.7～3.1tとなる。</p> <p>(2) 10月上中旬に発生する子株は収量性が優れ、株あたり総収量646～738g、可販果収量457～499gとなる。10aあたり総収量4.0～4.6t、可販果収量2.8～3.1tとなる。</p> <p>(3) 定植後に出蕾する花房を放任した場合と定植1か月後まで摘除した場合とでは収量は同等であるが、放任した場合は8月が最も収量が多く、定植1か月後まで摘除した場合は7月が最も収量が多い。</p>		
期待される 効 果	生産苗を自家採苗する際の農繁期の省力化に寄与する。		
利 用 上 の 注 意 事 項	<p>1 ランナー子株の増殖率は親株の栽培管理方法によって異なるため、事前に試験栽培を行い、必要なランナー子株の数に応じて親株を準備する。</p> <p>2 本資料は平成29年12月13日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。</p> <p>3 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任のもとに使用すること。</p> <p>「農薬情報」(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/)</p> <p>「農薬登録情報検索システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)</p> <p>また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用すること。</p>		
問い合わせ先 (電話番号)	野菜研究所 栽培部 (0176-53-7175)	対 象 地 域 及び経営体	県下全域の夏秋いちご作付経営体
発表文献等	平成27、29年度 試験成績概要集（野菜研究所） 東北農業研究 第69号		

【根拠となった主要な試験結果】



写真1 採苗ほ



写真2 冷蔵時の子株の状態



写真3 出庫時の子株の状態

表1 ランナー子株の発生時期が収量に及ぼす影響

(平成29年 青森野菜研)

年次	ランナー子株の 1.5~2.5葉期到達日	総収量		可販果収量												
		株あたり (g/株)	10a換算 (t/10a)	株あたり (g/株)										10a換算 (t/10a)	収穫個数 (個/株)	一果実重 (g/果)
				5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計					
平成 29年	平成28年8月23日	496	3.1	0	21	110	38	64	90	8	330	2.0	34	9.8		
	平成28年9月2日	611	3.8	3	5	120	51	83	104	15	380	2.4	38	10.0		
	平成28年9月21日	430	2.7	0	0	83	44	58	70	17	272	1.7	28	9.7		
	平成28年9月28日	481	3.0	0	0	54	59	76	123	21	332	2.1	31	10.6		
	平成28年10月5日	646	4.0	0	28	95	52	115	145	21	457	2.8	45	10.1		
	平成28年10月12日	738	4.6	0	13	105	57	112	194	19	499	3.1	49	10.1		

- (注) 1 定植は平成29年4月13日。ランナー子株は平成28年11月8日に親株から切り離して冷蔵し、平成29年2月15日に冷蔵庫から出庫後、12cm径ポットに挿し苗し、定植まで株養成。
 2 土耕栽培。白黒ダブルマルチ（白を上面）
 3 うね幅130cm、株間25cm、条間15cm、2条千鳥植え（6200株/10a）
 4 施肥量（kg/10a）N:P:K=7:6:7（エコロング413-180日タイプを全量基肥施用）
 5 定植後1か月間、出蕾した花房を摘除し株養成。

表2 花房摘除処理による株養成が収量に及ぼす影響

(平成27年 青森野菜研)

年次	花房摘除処理	総収量		可販果収量												
		株あたり (g/株)	10a換算 (t/10a)	株あたり (g/株)										10a換算 (t/10a)	収穫個数 (個/株)	一果実重 (g/果)
				5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計					
平成 27年	花房放任	686	3.8	27	46	106	126	77	103	58	543	3.0	44	12.5		
	5/14まで摘除	700	3.9	0	28	154	92	72	120	67	533	3.0	43	12.4		
	6/10まで摘除	586	3.3	0	4	110	106	61	119	77	477	2.7	38	12.7		
	7/10まで摘除	445	2.5	0	0	4	86	69	94	70	324	1.8	26	12.6		

- (注) 1 定植は平成27年4月3日。ランナー子株は平成27年11月に親株から切り離して冷蔵し、平成27年2月11日に冷蔵庫から出庫後、9cm径ポットに挿し苗し、定植まで株養成。
 2 高設栽培。栽培容器は発泡スチロール製、培地量は4.2L/株、白黒ダブルマルチ（白上面）。
 3 うね幅140cm、株間25cm、条間15cm、2条千鳥植え（5600株/10a）
 4 施肥量（kg/10a）N:P:K=14:11:13（エコロング413-180日タイプを全量基肥施用）